

私が見た8月6日の広島

小野崎浅治（当時20歳）
札幌市



私は90歳の今日まで生きながらえてきたが、70年前に広島市で起こったことは今でも忘れることができない。これこそが幼い時両親や知人から聞いていた地獄なのだと今でも思っている。

当時私は青森県東部92部隊に入隊し、和歌山県、兵庫県、そして大阪府に転属したが、8月6日夜中に移動命令があって和歌山県の名手（なて）を出発した。その時はどこに行くのかわからなかったが、行進中広島市が大変な状態になったと言う声が何となく聞こえた。広島駅に着いたが、夜間なので周囲の状況は何もわからず全員駅前まで野宿した。

そして夜が明けて7日、あたりが見えるようになると、自分が平常な世界から別な世界に迷い込んだような錯覚にとらわれた。目に入ったものは荒涼とした焼け野原だった。倒壊した家屋やひん曲った鉄骨、あたりかまわず散らばったレンガや瓦の破片、それよりも私の目を疑わせたのは、ある者はのけ反りある者は突っ伏し、そしてまたある者は屈み込みある者は佇んだままの無数の死体だった。大きな火傷で顔の表情もわからず、男か女かさえもわからない。着ていた着物も燃えてところどころにその破片を残すのみだった。それらの殺伐とした光景は無残というか悲惨というか、言葉ではとても言い尽くすことはできない。足の踏み場もなく雑然とした中を母親や父親、あるいは子どもや兄弟を捜しているのだろう、血と煤で真っ黒になった姿でよろよろと歩いている人の姿が見えた。ああ、これは地獄だ、広島は地獄になったのだ、と私は思った。

13時頃になってようやく上官が馬と共に迎えにきた。そして食事をして宿舎へ出発したが、道路は残骸で通る事ができない。大きな本通りだけがかろうじて通れた。恐怖に怯え、黒く焼けた木片のような死体に涙しながら、宿舎に予定されていた逡信局に向かった。広島市は川の多い

ところだが、途中常盤橋から見た神田川は、水を求めて川まで行けずに亡くなった人々が何百、何千と河原にいた。彼等は軍人ではない、全員民間人である。なぜ敵対行為もしていない民間人をこんなにも犠牲にしなければならないのであろうか。逡信局に着いたが、火災にあって建物は窓もシャッターもないただのコンクリートの建物に変わっていた。職員の遺体はなくただ骨だけが残っていた。私たちは遺骨を拾って油で黒くなった床の上に板を敷いて泊った。

10日ほど救助活動や死体整理をしたらどうか、16日に命令を受けて岸和田市に移動した。ここでの任務が終了時本部から広島には戻らず帰郷せよとの命令が出たのでそのまま故郷に帰った。一緒に行動した上官や戦友には別れの挨拶をすることもできなかった。

生存被爆者としての悩みや苦しきも数多く味わってきた。とくに50歳になる頃までは身体がだるくずっと体調不良が続いた。病院に行ってもわからなかったが、後に典型的な原爆症であることを知った。

広島駅頭で見た地獄絵図の衝撃と、あの時別れたままの上官や戦友の姿を今でも夢に見る事がある。願わくは全員無事に生きながらえてほしいと痛切に思うのである。原子爆弾は悪魔の兵器である。人間は人間らしく生きるために生れてきた。原爆は絶対使ってはならない。作ってもならない。保管してもならない。国の威信の誇示のための道具にしてはならない。私は一人でも多くの人に原爆の実相を伝える責任を感じながら70年前のあの日のことを思い出している。